

「いちじくの木のとえ」

2015年12月09日

ルカによる福音書 21 章 29 節～33 節。それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

主イエスは「いちじくの木」の譬えを話された。いちじくはアラビア半島、地中海沿岸を原産地としている。聖書にしばしば記され、ぶどうと共に豊かさを象徴する果物である。アダムとエバが神から食べてはいけないと言われた「善悪の知識の木」の実を取って食べた時、裸であることに気づき、いちじくの葉をつづり合わせて腰を覆った。徴税人ザアカイは主イエスを見ようと先回りして、いちじく桑の木に登って待ちうけた。受難週の二日目、実のついていないいちじくの木に向かって主イエスは「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」と言われると、翌日、その木は根元から枯れていた。このように、いちじくはイスラエル人には身近な木である。

主イエスは「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい」と言われた。草木の成長変化を見て、季節を知ることはできる。「それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」「これらのこと」とは、先に話された宇宙的な広がりの中での天変地異、地上での耐え難い苦難と悲惨である。これらの異変が起こったら神の国、即ち、終末到来の徴であると悟りなさいと言っていると思われる。いずれにしても、黙示文学的な表現で、世界の終りが来ることを語っている。

そして「はっきり言うておく」と特別な注意を喚起し、次のように語っている。「すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」終末時までには滅びないが、終末時には全てが滅びるという意味であろう。その終わりの日が来ても、主イエスの言葉は決して滅びない。「わたしの言葉は決して滅びない」という言葉は神への全き信頼であり、希望の言葉であった。

旧約聖書のイザヤ書 40 章 7 節 c、8 節に「この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」と書かれている。(南)ユダの民はバビロンで捕囚となり、奴隷の屈辱を受けていたが、ペルシャのキュロス王によってエルサレム帰還許可がでた。その時、第二イザヤは、人間の栄枯盛衰は草木のように移ろうが、神の言葉は永遠に変わらないと帰還できる喜びを語っている。新約聖書のペトロ書(一)1章24節c、25節aにイザヤ書の同上聖句を引用し「草は枯れ、／花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」と書かれている。キリスト教徒に対する誤解、偏見と迫害の中で、変わる事のない神の言葉の確かさを語り、励ましの言葉としている。神の変わる事のない言葉とは神は人間を愛し抜いているということである。その愛は主イエスの十字架と復活の赦しにおいて明らかに示された。キリスト教信仰は主イエスの赦し(是認)の愛を信じ、自分自身を受け入れ、他者との共生に向かって生きる信仰である。主イエスは、生きています。今も、天地が滅び去る終末時も、神の愛は変わることがないと語っている。